

フランス視察報告3 パリの知的障害児通所施設について
——IME Cour de Venise (IME クール・ド・ヴニーズ) ——



■視察の目的

海外では障害をもった子どもたちがどのような環境で暮らし支援されているのか。今回の視察先としてフランスを選択した理由は、マクロン大統領が、2020年の障害者に関する全国会議において国内の障害者支援を充実させることを約束し、いまが大きく変わろうとしている時期だからです。演説では毎年数百人もの障害を持った方々が他国に支援を求めて流出していることに触れ、国内で誰もが尊厳ある自由な生活を送れるようにすることを目標に掲げています。そのような中、フランスでどのような建物がつくられ、また運営されているのか、それを知ることを視察の目的としました。

■知的障害児通所施設（IME）とは

知的障害児通所施設（IME）とは、知的障害や発達に支援が必要な子どもに対して、教育と医療を組み合わせた専門施設で、教育・訓練・療育を提供する場とされています。

障害によって通常の学校教育を継続して受けることが困難な場合に、各自のニーズに応じた支援が提供されます。学校で受けるような教育（読み書き、その他の基礎学習）だけでなく、言語療法や心理療法、自立生活のための訓練や社会参加を促すような活動が行われています。利用形態は様々で、日中のあいだの滞在、午前か午後だけの半日滞在、または日をまたいで宿泊などニーズに応じて選択することができます。

■施設概要

IME クール・ド・ヴニーズについては、「Autisme en Ile-de-France (AeIDF)」の WEB サイト（★01）には以下のようにその概要が記載されています。

「パリ 3 区にある IME クール・ド・ヴニーズは 2008 年にオープンし、12 歳から 18 歳までの自閉症または広汎性発達障害（PDD）を持つ若者 22 人を受け入れています。

○チーム

監督：ローレンス・メルル＝ピウ

従業員数 38 名（2023 年 12 月 31 日現在）

2023 年の平均年間 FTE：31.6 （★02）

○活動

青少年への支援は包括的であり、個々のニーズに合わせて調整されています。その目的は、家族、施設、職場、レジャー施設、文化施設など、社会環境の中で自分の居場所を見つけ、愛する人や他の人々と効果的にコミュニケーションをとることができるようにすることです。

○教育プロジェクト

IME にはフルタイムの派遣教師を擁する教育ユニットがあり、これにより学校内での継続的な学校学習が可能になります。教育プログラムは個別化されており、思春期の子どもの潜在能力を包括的に評価した上で構築されます。このプロジェクトでは、最も適切な教育手法（TEACCH、ABA など）を活用し、保護者との緊密な協力のもとで開発されます。

目的は、多面的なアプローチを通じて、受け入れる青少年一人ひとりが最大限の自立性を獲得し、環境との関係の質を向上させ、能力を最大限に活用できるようにすることです。」（★03）

★01 Autisme en Ile-de-France (AeIDF)：

https://www.autisme-en-idf.org/814_p_50442/ime-cour-de-venise-75.html

★02 FTE はフルタイム換算を表す用語。年間平均の労働量を 1 日換算した結果。

★03 Web ブラウザの翻訳機能による。

■視察内容報告

施設内部は副施設長にあたる職員の方が案内してくれました。国も業界もちがいますが障害児・者の支援という面でつながっているのだということが感じられます。施設での支援の現場は、日本と似た光景が広がっていました。TEACCH という単語も話の中で実際に出て、アメリカで生まれたこの方法が世界共通で行なわれていることに実感が得られました。視覚優位の方が多い自閉症者に対して、絵カードで組み立てたスケジュール表やコミュニケーションが有効なことは日本でも広く知られています。環境が異なる海外でも共通の方法を使って支援が行われていました。

(1) 利用者のグループ分けされた部屋



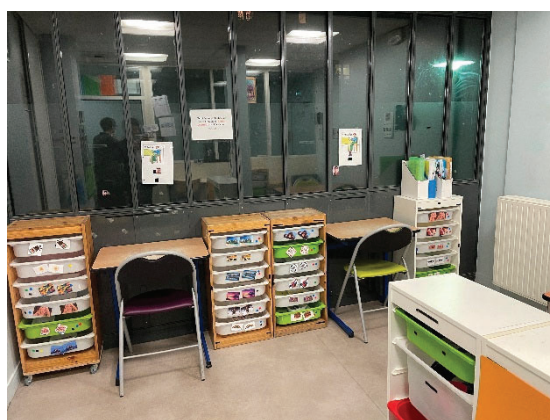
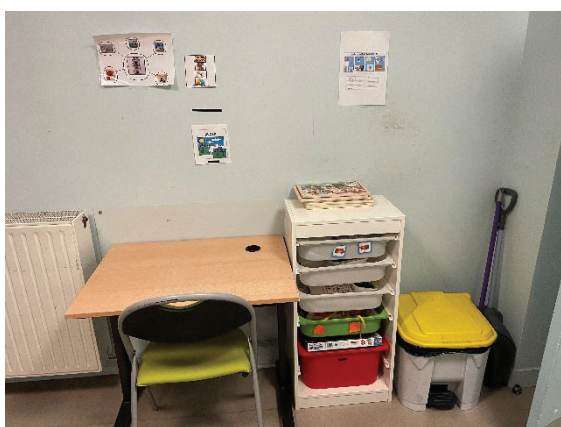
通所施設内は、基本的には利用者は年齢層でグループ分けされ、それぞれが与えられた部屋に属する形になっていました。中には、年齢は多様でも教育プログラムが似ている方々でひとつのグループをつくっていることもありました（レバノン人でフランス語が苦手な方など）。出入口には、グループに所属する利用者の顔写真が貼られ、利用者には自分の部屋がどこなのかわかりやすくなっています。クラスによって、壁に貼られた教材の内容が異なり、上の写真では、月や数字、色の表現の仕方などが貼られています。教室と表現した方が近い雰囲気です。

(2) スケジュール



室内には、それぞれの利用者の顔写真が貼りつけられたスケジュールが掲示されています。時間軸に沿って上から下に絵カードを貼り、毎日組み立てられます。利用者にもよりますが、午後のある時間帯は、自分の希望に応じてメニューを選択することができるそうです。

(3) 作業スペース



室内には作業スペースが複数設けられており、作業机とその作業に必要なパーツが入った棚がセットになっています。棚からカゴを順番に取り出し、絵カードを使いながら自分の作業を自分で管理して取り組んでいきます。

どのグループでも自分にひとつの作業机が与えられることは共通ですが、①横にあるひとつの棚だけを使用する、②横にある別の利用者と共有した棚を使用する、③離れたところにある棚から必要なパーツをとってくる等、その作業内容はグループや利用者ごとの状況によって異なります。

(4) アトリエ



施設にはアトリエがあります。火曜日、水曜日と特定の日にはボランティアの講師が来て、2～3人の利用者がここで絵を描きます。静かに絵を描くことは、心理的にもよい効果があるようです。毎年6月にこうした施設が集まって開催されるフェスティバルがあり、それに向けて作品づくりに取り組んだむようです。また、廊下はギャラリーのように使われており、綿棒を使ってつくられたガイコツが飾られていました。



(5) カームダウン室



ここは利用者が落ち着くための部屋として使われています。たとえば、朝に 1 時間くらい車に乗って来られる方もおられるようですが、送迎の疲れが原因で動揺した気持ちを静めるために使われています。

また、自分を傷つけたり、他人に暴力をふるってしまったりする利用者がいます。頭痛がある利用者が自分の頭を叩いてしまう、歯が生え変わる時期にある子どもの利用者の気持ちが落ち着かなくなる、そうした時に、この部屋に入りドアを閉めておくと静かに過ごせるようになるそうです。部屋の照明は明暗の調整が可能な仕様になっています。

なお、この部屋の使用については、親の署名により許可を得て使われます。滞在する時間、扉を開放状態にしておくかどうかなど、運用の仕方を細かく取り決めるそうです。

(6) トレーニング室



専門家のトレーナーが、それぞれの利用者の運動領域を見定めて、体を動かすトレーニングをします。リハビリ的なものだけではなく、外に出ること自体が厳しい方には、まずここで運動してから外に出るという使い方や、ジャンプができない人は、この部屋で練習してできるようになってからグループで行なわれる運動の輪に加わるなどの使い方をされているようです。

(7) 食堂



施設内には食堂があり、基本的にはここで食事をするようになっています。利用者の特性はさまざまで、ほとんど見守りが必要なく、おかわりを自分でお願いし、横目に見守るだけですむ利用者たちもいる。そうかと思えば、ガラス張りの窓際では食べられない利用者や奥まった席でないと食べられない利用者、逆に入り口近くでないと食べられない利用者などがいるので、食事場所に関するニーズは尊重して座席を決定しているようです。

食事の時間も療育の一環だと捉えられています。行動が激しい利用者だとそばで見守る必要がありますし、フォークなどの食器を使わずに手ばかり使って食べようとする利用者、偏食が極端な利用者などがいるので、そうした利用者の食事には配慮が必要になります。

特徴のある利用者は、座席のうしろに注意事項が掲示されています。ひとりでは食事をするときに、エプロンとお皿とフォークとナイフとメニューが用意されていないといけません。もうひとりでは、メニューとランチョンマットが必要とされています。食事と道具の対応についても、フォークとナイフは食べるときに使うものなのか、味見するときだけは指を使ってよいことなどが細かく書かれています。ある利用者は食堂に本やおもちゃを持ってきたがるため、その場合は、持って来させてもよいが横において食べさせるようにすることなど、どこまで子どもの要望を尊重するかということが書かれています。1週間ごとに療育する担当者が変わる仕組みになっているようで、こうした情報が重要なようです。なお、食堂は利用者だけではなく、職員も使用されています。

(8) 日常生活に近い環境を準備している



同じ敷地内の別棟に、より日常の生活環境に近い空間が用意されていて、社会に出ていくための準備をする施設として使用されています。



出入口をはいったところに大きなキッチンがあります。週1回程度自分たちで調理を行なう機会が設けられ、包丁の取り扱い方などの直接調理に関する技術だけでなく、いかに清潔さを保つかなど衛生面についても学びます。

キッチンだけでなく、リビングを含めて照明については、感覚過敏の方の目に光源が入らないように間接照明とされています。ほかにも周囲が衝立で隠された、ブース状の椅子なども設置されています。また壁は、パステルカラーを基調とし、また素材も特別な感触を持たせず「つるつる」の壁となっています。中には大声を出してしまう方もいるため、隣の住人に配慮して、壁の一部には遮音材料が使われているそうです。

■その後の暮らす場所

住む場所について、IME を出た後の受け入れ先の問題はあるようです。この施設は年齢の上限が20歳ですが、21歳、25歳になった方でも、そうした状況から通所を拒むことが難しいために受け入れてこられました。しかし、そのような中、2025年に成人の障害者が入所できるFAM等のいろんな施設ができたおかげで、11人の受け入れ先を見つけることができたようです。就学期間を終えたら、親が年を取る前に独立し、住める場所を見つけて住むことが理想的だと話をされていました。